

新刊紹介

Robert Hampson 著 *Joseph Conrad*

London: Reaktion Books 2020. 208pp.

Joseph Conrad: Betrayal and Identity (1992)をはじめとする数々の記念碑的著作によってコンラッド研究の世界を長く牽引してきたロバート・ハンプソンによる「新しい」評伝が出版された。難解なコンラッドの物語を具体的な歴史的文脈の中に置き、簡潔な言葉(英語)で解説する本書は、歴史家M.ジャサノフによる*The Dawn Watch: Joseph Conrad in A Global World* (2017)のように、¹研究者だけを対象とした評伝というよりは、学生や一般読者にも利用しやすい入門書である。著者は、(ポスト・)コロニアルな作家コンラッドの政治性に焦点を当てながら、新旧、主流・反主流問わずさまざまな立場による解釈をバランスよく紹介しており、ディケンズ、フロベール、ドストエフスキー、珍しいところではジョージ・エリオットなどのメジャーな作家だけでなく、ベッケ(Louis Becke)などのマイナーなオーストラリアの作家²をコンラッドとリンクさせている。F.M.フォード研究者としても知られるハンプソンによるこのコンラッドの共作者への言及も興味深い。約 200 頁とコンパクトではあるが、本書によって読者は 19 世紀から 20 世紀の文化の中で巨視的にコンラッドの人と作品を眺めることができるだろう。

コンラッドの入門的な評伝としては既に、大御所セドリック・ワッツによる *A Preface to Conrad* (Longman, Preface Books Series, 1982)やアラン・シモンズによる *Joseph Conrad* (Palgrave Macmillan, Critical Issues Series, 2006)等があるが、今回新たに評伝が出るまで実に 10 年以上が経過していることになる。このとこ

¹ 一般読者層を拡大するという意味では歓迎すべきジャサノフ本が実は、コンラッド批評の伝統的なパラダイムを無批判に反復・強化する危険性については、山本薫、「新刊紹介」『コンラッド研究』第 10 号(2019)148-150 (https://josephconrad.sakura.ne.jp/wp/?page_id=314)を参照。

² ベッケについては、Taku Yamamoto, 'The Pacific Imagination and the Narrative of Romance: Louis Becke, Joseph Conrad, and Robert Louis Stevenson', a paper read at the 5th conference of Joseph Conrad Society of Japan (Kyoto, 10 November, 2019)、あるいは Ann Lane Bradshaw, 'Joseph Conrad and Louis Becke', *English Studies*, Volume 86, Issue 3 (2005), 206-225 を参照。

ろコンラッド作品の新訳が続々と出版されている日本の読者にとって、³この評伝は、遅いというよりはむしろ絶好のタイミングで到来したと言えるかもしれないが、世界的に見れば、コンラッド研究において既に伝説的存在となったハンプソンによる評伝がなぜこれまでなかったのかという疑問は当然湧くだろう。実際本書の企画は以前からあったらしいが、今年の2月に亡くなったZ.ナイデルの伝記 *Joseph Conrad: A Life* と J. スティープによる *The Several Lives of Joseph Conrad* がコンラッド生誕 150 周年を記念して 2007 年に相次いで出たため、⁴ハンプソンは自著の出版を見合わせたという。こうしてハンプソンが評伝を眠らせている間、新たな伝記的事実の発見はなかった。本書も、ポーランド独立運動の活動家でコンラッドを祖国再訪に誘ったユゼフ・レティンガーの伝記 *War and Diplomacy in East and West: A Biography of Józef Retinger* (2019) をもとにした彼のスパイ活動の詳細(第9章)を除けば、特に耳新しい事実を提供しているわけではない。しかし、たとえ新事実の発見はなくとも、コンラッド研究自体はこの間着実に変化した。本書はそうした変化を反映しつつ、これまでの評伝とは違う形でコンラッドの人生と作品を見せようとする。その意味で「新しい」評伝である。

この「新しさ」は、版元の **Reaktion** 社による現代の先駆的な文化人の評伝シリーズ **Critical Lives** の一角を占める資格を本書に与えている。⁵ **Reaktion** 社は 1985 年にエジンバラで設立された出版社で、もともとアート、建築、デザインを専門としていた。近年は食や政治、動物、地理、音楽、歴史等へとその守備範囲を拡大している。そのタイトルにはバルト、ヴェイユ、

³柴田元幸訳「秘密の共有者」『ブリティッシュ&アイリッシュ・マスターピース』(スイッチ・パブリッシング、2015)、『ロード・ジム』(2011; 河出、2020)、高橋和久訳『シークレット・エージェント』(光文、2019)。拙訳『放浪者』も幻戯書房から近日刊行予定(『黄金の矢』『サスペンス』続刊)。

⁴これらの伝記の書評については、設楽靖子「新刊紹介 Zdzisław Najder, *Joseph Conrad: A Life* (2007); John Stape, *The Several Lives of Joseph Conrad* (2007)」『コンラッド研究』第1号(2009)、51-57 (https://josephconrad.sakura.ne.jp/wp/?page_id=292)を参照。

⁵ただ、この評伝の話は同僚のジョイス研究者 A.ギブソンが持ちかけたもので本人の選択ではないらしい。お忙しい中、本書出版に至る経緯、コンセプト等に関する質問にお答えいただいたハンプソン先生にここに記して感謝したい。

フーコーやドゥルーズ、バタイユといった大陸の思想家に、カーロ、ダリ、マグリットといった画家、作家ではウルフ、ジョイス、ベケット、ポーにランボー、フォークナー、メルヴィルといった革命児の名前が並ぶ。一方、先に挙げたような従来の評伝のほとんどは、「英国」のコンラッド研究者、「英国」（や米国）の出版社による、「英国」の「偉大な伝統」を構成する作家についての、主として英語圏の読者を想定した入門シリーズの一つだった。それらは、コンラッドの人生をポーランド時代、船乗り時代、作家時代に三分割し、作家としてのキャリアを前・中・後期に分け、「闇の奥」(1902)、『ロード・ジム』(1900)、『ノストロモ』(1904)等の中期の「傑作」に紙面の多くを割き、初期の「習作」と後期以降の「駄作」には申し訳程度に触れるだけだった。こうした構成の背後にあるのは、コンラッド批評の支配的な評価基準、‘achievement and decline’パラダイムである。F.R.リーヴィスとともに戦後のコンラッド研究において影響力を揮った T.モーザーの *Joseph Conrad: Achievement and Decline* (1957)に因んで名づけられたこのパラダイムの下で多くの批評家は、(白人)男性主人公の精神的苦悩を描く中期の心理小説群を特権化し、後期作品で苦手な女性を中心に据えて商業的に成功してからのコンラッドの想像力は枯渇したと考えた。ハンプソンの評伝は、そのような作家の「達成」と「衰退」の筋書きをただ時系列で辿ってはいない。本書を貫くのは「女性」「アメリカ」「フランス」というトピックであり、それら三つは独立した章を振り当てられているだけでなく、挿話としても散りばめられ、各章を閉じつつ次の章へと読者を導く役割を与えられている。

コンラッド批評において「女性」、「アメリカ」、「フランス」を前景化することは、つまり、これまで過小に評価されてきた「女性」を主人公とする後期作品群、そして、「フランス」を舞台とする晩年の歴史小説群に注目するということであり、(『ノストロモ』の舞台の南米ばかりでなく)コンラッドの商業的成功に寄与した北米市場に光をあてて、孤高の前衛文学の旗手と目されがちな作家が実は大衆的人気を渴望し、成功を手にしてからはむしろ積極的に広報を利用してきた点を強調することである。つまりそれは、序章‘Conrad’s Reputation’が概観する、支配的な価値基準（パラダイ

ム)の下で繰り返されてきた「船乗り」や「海洋小説の作家」といったコンラッド像の再考を促すことである。コンラッドの影響範囲は、英米にとどまらず、ヨーロッパも越えてカリブ、南米、アフリカに広がる——そう序章は締めくくる。

はじめの二つの章では、コンラッドの読者にはお馴染みの写真とともに、作家としてデビューするまでの時期——幼少時から祖国を離れるまで(第1章‘Family Background’)と、フランスで船乗りとなってからアフリカ体験まで(第2章‘Maritime Career’)——が取り上げられ、続く第3章‘Malay Fiction’から作品の解説が始まる。ジャサノフが前掲書で主要作品の歴史化を通してコンラッドを反帝国主義者として再定義したように、デビュー作『オルメイヤーの阿房宮』(1895)執筆時期を扱う第3章においてハンプソンは、出版当初植民地支配を称揚する亜流の冒険小説として読まれた『オルメイヤー』を、植民地支配を支える人種的優越感をむしろ否定し、「共通の人間性(common humanity)」という感覚が「いたるところに顕在化した」作品(48)として読み直すことで、コンラッドに貼られた人種差別主義者のレッテルを払拭しようとする。「共通の人間性」という見地に立つこのマレー小説の anti-racist な面がもっとよく知られていれば、「闇の奥」の人種差別的側面を弾劾する「偏った」批判(49)も避けられたのではないかとハンプソンは主張するが、どうだろうか。確かに『オルメイヤー』のテキストには人種や宗教の壁を無効化するような共同性が垣間見える瞬間があるが、⁶「共通の人間性」という表現は要注意だろう。それは逆に個別性や特異性を還元しかねない危険性があるからだ。この点は、他の箇所でも見られる本書の transnationalist 的な身振り⁷と関係してくるので、ここでは掘り下げず、最後にまとめて考えてみたい。いずれに

⁶ 拙論‘*La folie Almayr: Madness in Conrad and René Magritte*’, *Some Intertextual Chords of Joseph Conrad’s Literary Art Conrad: Eastern and Western Perspectives Series*. Vol.28 (2019), 240-242.ではその共同性を「赦し」の問題として考察した。

⁷ ハンプソンの近年のテーマの一つ transnationalism は、2017年9月に仏リモージュ大学で開催された国際学会‘Between Texts and Theory: Transnational Conrad’のテーマだった。この学会の論集の Robert Hampson, “Books may be written in all sorts of places’: Conrad’s Transnational Beginnings’, *L’Epoque Conradianne*, vol.41 (2019, Presses Universitaires de Limoges), 29-39 を参照。

しても、『オルメイヤー』を好評価した批評家 E.ガーネットの助言によってコンラッドは本格的に海洋小説執筆にのり出し、「海洋冒険小説の作家」として成長していく。しかし、その過程は決して順調ではなかった。ガーネットの忠告はむしろ、もともと筆の遅かった駆け出しの作家を苦しめ、結果として彼を生活のための著作、つまり原稿料のよい短編の執筆に走らせた。第 4 章‘Conrad and the Literary Marketplace’が示すように、19 世紀ヴィクトリア朝時代の三巻本は単行本に移行し、英国でもアメリカでも短編小説を連載する定期刊行の雑誌が台頭していた。アフリカの金鉱への投資によって伯父の遺産も使い果たし、経済的に苦境に立たされていたコンラッドは、言わばガーネットの助言を受け入れざるを得ない状況にあったのだ。さらに、同じ状況の中で生み出された『ナーシサス号の黒人』(1897)が抱えるジャンルの混交性や諸イデオロギー間の矛盾は、個人的語り手の誕生を含む語りの実験を経て、視点人物マーロウで解消される。「青春」(1902)「闇の奥」『ロード・ジム』から『ノストロモ』で頂点を迎えるそうした印象主義的な語りの技巧の展開は、審美的な出来事であるだけでなくブラックウッドによる物理的援助によって可能になった現象だったことが第 5 章‘Marlow and Blackwood’s’では示されている。

第 6 章‘The Americas, Nationalism and Empire’が取り上げる「現代英文学における最も重要な歴史小説」(93)『ノストロモ』を境に、コンラッドは過去の個人的体験を基にした創作スタイルから離れ、もっと広い公的なキャンパスの上で物語を紡ぎはじめる——コンラッド批評におけるこの定説もまた、ここでは外的要因から説明されている。まず一つ目は、ヨーロッパにおけるナショナリズムの高まり——ビスマルクによるドイツ帝国成立(1871)とガリバルディの貢献によるイタリア王国成立(1861)——と、国際資本による新しいタイプの植民地化である。二つ目は、人脈の拡がりである。スティーブン・クレインを介して出会ったフォードから借りた英国南東部のペント・ファームに引っ越すと、近隣に住む H.G.ウェルズやヘンリー・ジェイムズら文人仲間とコンラッドの交流は活発化した。『ロマンス』(1903)、『相続者』(1901)、『犯罪の性質』(1909)の共同執筆作業を通して作家として鍛えられたフォードは『善良な兵士』(1915)三部作を、コンラッドは、『ノストロモ』を生み出した。また、『ノストロモ』という政治小説への影響を考えた時に、社会主義者カニングム・グレームとの出会いも無視できない。そして、代理人 J.B.ピンカーは、作家との

密接な関係を重視したブラックウッドの古いタイプの出版業から、プロ意識に支えられたビジネスの場としての文学市場へとコンラッドを送りだしたが、ピンカーに対するコンラッドの借金(前借り)は、次作『シークレット・エージェント』(1907)執筆時にも膨らむ一方だった。

「エージェント」ピンカーをこのように登場させて次章‘Anarchists and Secret Agents’に繋ぐハンプソンの意図は、もちろん、よく議論される文人同志の影響関係ばかりでなく、その言わば下部構造(経済)を浮かび上がらせることであろう。第7章では、『シークレット・エージェント』執筆に至る経緯、物語のソース、アイルランドの自治問題というサブテキスト、ロンドンの貧困、「紳士クラブ」に過ぎない当時の政府、反移民意識の高まり等という当時の文脈の中で作品が解説されている。ここでは、2017年にイアン・ワット賞を受賞した *Conrad's Secrets* (2012)で政治、都市、性、医療、海軍といったテキストのさまざまな「秘密」をコンテキスト化してみせたハンプソンの本領が発揮されている。似たアプローチでコンラッドの主要な作品を英米主導のグローバリズムという観点から歴史化したジャサノフと再び比較するならば、ハンプソンの場合、英国国内の問題により焦点が当たっている。前章の『ノストロモ』同様、『シークレット・エージェント』執筆の情報源としてのフォードの重要性は第8章でも指摘されているが、ここでも瞠目すべきはやはり、次章への橋渡しのその方法だ。ナチスの台頭を背景に執筆された回顧録 *It Was the Nightingale* (1934)の中でフォードは、反移民感情が高まりを見せた1907年頃、ロシアのボグロム(ユダヤ人への集団的暴力)を逃れた多くのユダヤ人亡命者がロンドンに到着するのを目撃し、「イングランドの最も輝かしい思い出」を振り返り、「政治的亡命者や殉教者の存在があるからこそ、イングランドは他国と肩を並べることができたのだ」と述べている。フォード版『シークレット・エージェント』からのこの引用は、コンラッドの物語同様、現在の英国の状況を彷彿とさせつつ、⁸政治的亡命者や「殉教者」がうごめく『西欧の目の下に』(1911)を取り上げる次章‘Betrayal and Breakdown’へすんなりと読者を導く。

それだけに、続く第8章ではハンプソンが影を潜め、芸術(技巧)と、コンラッド

⁸ 詩人でもあるハンプソンは、テリーザ・メイが首相時代から自らの使命とした移民排除に抗議する詩集 *hostile environment* (purge 2019)を編集し、自らも‘testing ground’と題された詩を寄せている。

の人生の照応関係に対する素朴な信仰に基づく K. キャラバインの議論⁹にもっぱら依拠して『西欧の目』が説明されていることに読者はやや戸惑うかもしれない。例えば、ハルディンに対するラズーモフの裏切りの動機は、ポーランドのロマン派的なナショナリズムという父の遺産に対するコンラッドのうしろめたさや嫌悪感によって説明されるのだが、本章のそうした印象批評的な議論は、ロシア語で書かれたラズーモフの日記を英語に翻訳する英国人の語学教師が物語冒頭で突き付ける、言葉と現実の(敵対)関係の問題そのものを最後まで読者に考えさせる。『西欧の目』完成後、深刻な神経衰弱に陥ったコンラッドが、(妻ジェシーによれば)熱に浮かされてポーランド語でうわごとを言ったという有名なエピソードもまた、『西欧の目』の根底に「ポーランド」が隠されていることを証し立てている——という具合に。

無意識に言葉にしてしまうほどコンラッドに憑りついていた「ロシア的体験」は、次章第9章‘Poland Revisited’が記述する通り、遂に彼を祖国へと連れ戻す。『西欧の目』の執筆によって憔悴きったコンラッドは、フォードや代理人ピンカーと仲たがいでしまったが、回復後新しい人間関係を手に入れる。コンラッドの遺言執行人の一人で文筆家のカール(Richard Curle)、草稿の収集家クイン(John Quinn)をはじめとする賞賛者たちである。そして、この時期コンラッドは小説家ベネット(Arnold Bennett)を介してポーランド独立運動の若き活動家レティンジャーと出会い、彼に誘われるままほぼ20年ぶりに祖国を訪れた。レティンジャーとは対照的に、文人コンラッドはあくまで言葉で独立運動に関わった。英仏の保護や介入を前提としていたコンラッドは、英の戦争プロパガンダには協力し、空軍・海軍の視察も行った。これらの視察から生まれたのが、英海軍将校と愛人の対話が入れ子状の構造をなす謎めいた物語‘The Tale’(『噂の物語』所収、1925)である。この複雑な不倫物語には、この時期に出会い、視察にも同行したジャーナリスト、ジェイン・アンダーソン(Jane Anderson)との親密な関係が影を落としている。

これまでの評伝は、「男性的な」作家コンラッドの若い頃の密輸への関与や自殺騒動を取り上げることはあっても、不倫をわざわざ深く掘り下げようとはしなかった。ところが、続く第10章‘Conrad and Women’は、ポーランドという言葉ば過去の

⁹ Keith Carabine, *The Life and the Art: A Study of Conrad's "Under Western Eyes"* (Rodopi 1996)

世界から帰還したコンラッドの人生に舞い降りたこの魅力的なアメリカ人女性ジェインが、コンラッドを含む影響力ある数々の男性ばかりか、コンラッドの息子ボリスをも虜にしたことを詳述する。ジェインとの「情事」(疑惑)は、「女性に弱い」(38)コンラッドの人生における数々の女性関係のうちの一つにすぎず、「女性嫌い」の「海の男」という従来のイメージは、19世紀末ヴィクトリア朝時代を生きた船乗りマーロウと作者を混同することで生じるイメージだとハンブソンは言う。実際女性が苦手どころか、女性に好まれ、友人も多かったコンラッドは、『チャンス』(1913)に登場するフェミニスト、ファイン夫人の描写が示唆するように、彼なりにフェミニズムに関心を寄せており、女性参政権を擁護する署名もしている。

後期から晩年のコンラッド作品において女性は、男性の視線の対象であることに抵抗し、男性への隷属状態から抜け出そうとする。後期作品における女性の存在感の増大は、第11章‘Commercial Success and North America’で明らかにされるように、市場における女性読者の増加と平行しており、それは当時の新聞の新しい戦略に影響した。そして、後期コンラッドの商業的成功のもう一つの大きな要因は、ここまでも何度も触れられていたように、アメリカ(北米)の雑誌である。はじめは補足的な収入源という程度にしかとらえていなかったアメリカにコンラッドは次第にターゲットを移動させていく。コンラッドの草稿を買い取ったのもアメリカ人の収集家クインであり、全集の出版に先鞭をつけたのもアメリカの出版社だった。のちに彼を「偉大な伝統」に組み込む英国よりも、アメリカこそがコンラッドを大作家として見出し、もてはやした。折からの映画産業の隆盛も彼を一層裕福にした。

*

従来の評伝は、商業的成功を手に入れたあとのコンラッドの人生と作品を駆け足で眺めるだけだった。なぜなら、そこには「衰退」しかないと考えからだ。しかし、本書は章12章‘Conrad and France’を設け、よく引き合いに出されるフロベールやモーパッサンといった作家との影響関係ばかりでなく、何度もコンラッドの作品に回帰するフランスとその言語、そして、フランスを舞台とする晩年のナポレオン小説群の重要性を強調する。晩年のコンラッドは衰えを見せるどころか、歴史小説において技巧の実験を続けた。ハンブソンは、その技巧を、読者の期待を裏切る伝統的な *suspense* ならぬ「*suspension* (宙吊り)の詩学」(180)と呼んでいる。

ただし、近年やっとな議論されはじめたばかりの晩年の歴史小説は、まだ評価が定まっているとは言えない。慎重なハンプソンは、過小評価されてきたこれらの歴史小説を格上げして本書を結ぼうとするのではなく、スペンサーの『妖精の女王』から引かれた、『放浪者』(1923)のエピグラフが湛える「最後のコンラッド的曖昧さ (a final Conradian ambiguity)」(182)を前に沈黙する。コンラッドの死によって完成を見なかった最後のナポレオン小説『サスペンス』(1925)の結末(ならぬ結末)を模倣するかのように、言葉の意味と作者や文脈との関係を問いかげながら、その答えを *suspended* にしたまま本書を閉じるのである。

コンラッドの実人生とフィクション、そして、自らの評伝すら重ね合わせるかのような、結びの宙吊り状態は、ここまで手堅く進められてきたハンプソンの議論の後ではひととき異彩を放っている。ここまで著者が文字通りの意味を大切にして実証的にテキストを読んできたことを思い出すならまさに意外である。現に第12章では、ナポレオン小説執筆の副産物として生まれた短編「武人の魂」(1917)の「transnational な共感」(173)が、依然として境界線のはっきりとした国家の概念を前提に議論されていて、そこでハンプソンは、ナポレオンのモスクワ撤退時(1812)のロシアの将校とフランス人捕虜、そしてロシアと作者の間の共感を、第一次世界大戦の前線における英兵とドイツ兵の間の共感との単純なアナロジーで考えようとしている。しかし、ロシア(人の主人公)に対するポーランド(人の作者)の「共感」に刻印された支配・被支配関係の非対称性が、どこまで英・独の敵対関係に置き換えられるのか、そもそも置き換えて考えられるのかという素朴な疑問が浮上する。異質なものの異質性をこうして還元してしまう傾向は、第3章でコンラッドを反帝国主義者として見直す際の根拠として「共通の人間性」を『オルメイヤー』に読み込んでいたことともおそらく無関係ではないのだろうが、そうした標準化は、(著者本人の意図とはおそらく裏腹に)他者の他者性を尊重する「共感」からはかえって遠ざかってしまうように思える。あらゆる意味での自・他の二項対立の間の境界線を解体しながら境界にとどまり続けるようなコンラッドのテキストの身振りが曖昧さを生んでいるのだとしたら、西欧形而上学に特徴的な二項対立を脱構築しようとする大陸の思想はコンラッド文学の読解の一つの手がかりを与えてくれるように思われる。だがハンプソンは、大陸の現代思想及びその情動論の、そして新しい実在論の展開を踏まえた読みにはついには

とんど触れないまま筆^{ペン}を置く。¹⁰

ハンプソンのこの沈黙には、「哲学」と「文学」をはっきり区別する英国コンラッド批評の主流派の、大陸の思想に対する嫌悪感がうかがえなくもない。しかし、ハンプソンは、引用されることで『妖精の女王』のもとの文脈から離れた『放浪者』のエピグラフの詩句を通して、言葉の意味が話者とコンテキスト（文脈）にいかにか依存するかを示唆する——のかと思うと今度はコンラッドを脱コンテキスト化された領域に手放すことで(182)、どうも、自らのコンテキスト化のアプローチすら中断(suspend)している節がある。そうだとすると、本書の結び(ならぬ結び)における彼の沈黙は、主流による反主流に対する「抑圧」に見えて必ずしもそうとばかりは言えず、著者自らが「suspension(宙吊り)の詩学」と呼ぶもののまさに実演のように思えてくる。他の作家研究における批評の近年の先鋭化を見る限り、コンラッド批評における「新しさ」はもしかしたらその比ではないかもしれない。それだけコンラッド批評は伝統を固く守ってきた。しかしそうした状況は主流批評家だけに責任をかぶせて解決するわけではないだろう。第12章が示すように、晩年の歴史小説は「闇の奥」などの中期の傑作に劣らず「謎」が多い(178-9)。本書の結びで著者は、そうしたテキストの空白から新たな読みを切り開くことを誘いかけているようでもあり、もしかしたら読者はその沈黙の中にレジェンドからの声にならない声援を聴いてもよいのかもしれない。その意味で、遅れてきたこの評伝は、始まりの評伝である。

(やまもと かおる 滋賀県立大学 准教授)

¹⁰ Yael Levin の *Tracing the Aesthetic Principle in Conrad's Novels* (Palgrave 2009) や拙書 *Rethinking Joseph Conrad's Concepts of Community: Strange Fraternity* (Bloomsbury 2017) を通してデリダへの言及はないわけではないが、主にルネ・ジラルールやジャン＝リュック・ナンシーを援用し、ドゥルーズもその議論の射程に収めた Nidesh Lawtoo の例えば *Conrad's Shadow: Catastrophe, Mimesis, Theory* (MSU P, 2016)、彼の編集した *Conrad in the Anthropocene* (Routledge 2018) への言及は全くない。